

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 127 回

A.K. クーマラスワミの事績から アジアを再考する(下)

ダッカ・アート・サミット DAS2018 に招待されて(2018年2月8日-10日)

稲賀 繁美 (いなが しげみ／国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授)

〔承前〕DAS はバングラデシュ国文化省の協賛を得て、2年ごとに同国美術アカデミー Shilpakala Academy を会場として開催されてきた。主催するサムダニ美術財団の主任美術部長とサミットの主任キュレーターを務める Diana Cambell Betancourt の表現を借りれば、サミットは伝統的なビエンナーレ形式を拒絶して、南アジアの過去から現在にいたる創造的共同体の前進と促進を図る、国際的で脱領域のプログラムに力点を置く。入場無料の催しだが、前回の2016年にはわずか4日の日程で800名もの国際的に活躍する美術関係者が集い、13万8千人におよぶ来場者を記録したという。今回が4度目となるが、ここで南アジアと東南アジアとの広域的な関係と流通とが、初めて視野に組み込まれた。その象徴的存在といえるのが、クーマラスワミである。

国民主義と無政府主義と

2日目は朝から Sunwise Turn と題するコロキウム。筆者は DAS2018 フェスティバル総責任者、前述の Betancourt と、このコロキウムを組織したシ

ンガポール国立画廊の Shabbir Husain Mustafa から参加を要請された。南アジアおよび東南アジア美術史の草分けであり、両者を橋渡しした学究として著名な Anada K. Coomaraswamy (1877-1947) (以下 AKC と略記) の生後140年、没後70年、その画期をなす著作 *A History of Indian and Indonesian Art* (1927) 刊行から90年を記念して、それを手がかりに工業的・現代・地域を鍵言葉に、対象地域の藝術とその研究のありかたを問い直す企画である。

セイロン出身の高位カーストの父とイギリス人の母をもつ AKC はイギリスで勉学した後、20世紀初頭のベンガルのスワデン運動に関わり、セイロンの社会改革に参画するが、政治的な幻滅を体験し、北米に脱出。後半生をボストン美術館インド部門責任者として過ごす。ボストン美術館で岡倉覚三の継承者でもある彼は、驚異的な言語能力に恵まれ、南アジアの古典文学や哲学に通暁するかたわら、考古学、美術から宗教学に至る分野をくまなく踏破した碩学として夙に知られる。ヴェダーンタ思想に基づ

きニーチェやマイスター・エックハルトに傾倒したその知的遍歴は、日本の同時代知識人との並行性からも無視できまい。晩年にはジョン・ケージにも影響を与えたが、この点でも貞太郎・鈴木大拙と双壁をなす。Sunwise とは、政治的に危険視されて1917年に北米亡命を余儀なくされた AKC がニューヨークで出入りし、アナーキスト系知識人のたまり場となった、左翼系出版社の名称である。

自らもスリランカ出身のムスタファはまだ30代だが、信頼できる人柄と実力のほどはすでに折り紙つき。両大戦間の知的風土を体現した AKC は、植民地体制下の南アジアの桎梏を踏まえ、西欧社会への物神崇拜を拒絶しつつ、精神的な汎インド主義を唱えた。AKC の語る「インドの植民地」は、文化的交易圏に領土的な占有の印象あるいは誤解を与える用語として、これまでも疑問が呈されてきた。だがこれは、むしろ地域間の対話に実体を与える認知 cognite の道具であり、両大戦間のコスモポリタンな世界認識や、反体制派のアナーキーな連帯とも呼応する一とムスタファは議論を展開する。私見では Indian colony には、西欧列強による植民地体制への対抗言説としての「理念」が託されている。

再検討 AKC の中世主義

これに続く、午前の4つの発表では、AKC の仕事を歴史的に位置づける試みがなされた。

コーネルの Iftikhar Dadi は、AKC がノーマン・チャペルに居を定め、最初の妻 Ethel ■04 の助力と感化のもと、



■04 AKC と最初の妻 Ethel (Ifitikhar Dadi の発表より／撮影：稲賀繁美)

イギリスで私家版刊行した『中世シンハリ美術』(1908)を取りあげる。ケルムスコット・プレスの活字を用いた本書にはウィリアム・モリスの中世主義が顕著だが、ここで「中世」とは大英帝国の印度植民地支配開始(1815)以前の時代を指す政治概念・架空の意図的「誤用」。そのことを確認したうえ、論者はとりわけ本書に配列された図版に注目し、そこに滅びゆく民族学的資料と、すでに失われた他者像とを重ね合わせに表象する策略とそれに不可避な揺れを読み取る。私見では AKC はこの振幅のうちに、失われた過去の栄光への郷愁と、植民地下の窮状とを二重写しに描く。それにより、植民地化による文明化を正当化する帝国主義者の常套的視点を巧みに裏切って、反転させている。

ボンベイの Nancy Adjanja も同様の議論の枠組みを提案する。産業の工業化が進展するなかで「民衆」folk あるいは「地域出自」vernacular とは産業化以前の遅延の表徴でもあれば、反対に失われゆく文化的正統性 authenticity の拠り所でもあった。1980年代にガヤトリ・スピヴァックが提唱した「虐げられし者ども」subalterns の表象可能性を巡る議論の影響が顕著だ



■ 05 ナンダル・ボース《ジョラサンコのアトリエ》 1909年頃

が、具体的にはそこには、ヒンドゥー原理主義者から筋金入りの近代化論者にいたる陣営幅が含まれ、工藝復興を意図する職人や進歩的思想家までが視野に入る。私見では「今日の同時代における地域性」vernacular in the contemporaryに植民地近代の矛盾を見出すという論点そのものが、欧米中心史観の枠組みに捕らわれた隷属性を露呈している。なぜならそこでは、「同時代性」と「地域性」とは本来両立しないはず、という先入観が、英語語彙の範疇論の軛を元凶として反復されているからだ。だがこの理論的困難を逆手に取り、社会改革の訴えに上乘せしたのが、南アジア発の左翼理論の世界的席捲であった。

サンタ・バーバラの Swati Chattopadhyay は痛烈な論鋒で知

られるが、彼女は当時の南アジア社会の階層構造の縮図を AKC とタゴール一族との交渉のうちに解説する。カルカッタのジョラサンコにあった邸宅にタゴール一族や AKC らが集う光景を、ベンガルの画家ナンダル・ボースが幾分戯画化した有名な挿絵がある。

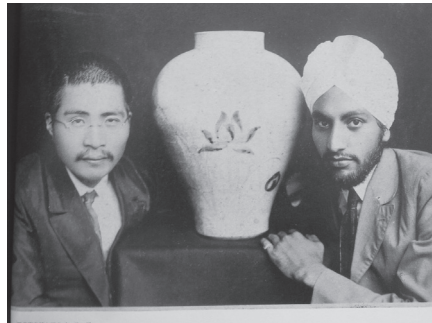
■ 05 画家のアボニンドロナトは左上に仰臥して読書に耽り、右上ではスレンドロナトが惰眠を貪る。その下のガガネンドロナトも水パイプを吹かして瞑想中。およそ労働とは無縁な彼らの足元で、眉目秀麗なる AKC が長い腕を伸ばして、なにやら書き物をしているボースに指図を下している。労働らしい業務に勤しんでいるのは、右下のボースただひとり。1909年の年記から見て、これは AKC が自らの収集を母体に出版するラージプト絵画目録

の草稿。実際の原稿作成は画家に任されており、高位カーストの連中は「思索」と「閑暇」scholē を享受する。ここに知識人たちの協働 collaboration の理想が、現実との酷い落差のうちに照らし出される。

モリス主義のインドと 「民藝」の朝鮮と

稲賀は AKC と日本との関わりについての報告を求められていた。詳しくはまた場所を改めて述べたいが、以上の記述からも、大英帝国統治下のインドやセイロンと、日本統治下の韓国・朝鮮の状況とに並行性を認めるのは容易だろう。AKC は亡命先の北米ボストン美術館で、岡倉覚三の跡を襲う立場にあるが、むしろ柳宗悦との比較からは、AKC の「民衆工芸」概念の異同や宗教観の類比までが、克明に浮き彫りとなる。さらに AKC のニーチェ主義は、第一次世界大戦直後に刊行された『シヴァ神の踊り』にも顕著だが、この著作が日本でも岡本貫栄の『印度美術の主調と表現』(昭和18年)などで共感とともに解説されていた事実は、今日のインド美術史研究からは忘れ去られている。

朝鮮陶磁研究の草分けとなった浅川巧と親交をもったグルチャラン・シン■08 は、インドでのスタジオ・ポタリーの草分けとして名を残すが、人智を焰に委ねる陶藝のあり方は、シヴァ信仰を通したニーチェの超人思想にも通じる。そこには唯我論的傾向と没我志向との交錯もみられるが、そうしたことも、これまでほとんど顧慮されてこなかった。



■08 浅川巧と Gurchalan Singh 1930 年 8 月 1 日の署名

晩年の柳宗悦の妙好人への接近には、鈴木大拙の直接の影響が明らかだが、その『日本的霊性』を AKC のヴェダンタ回帰に顕著な「永続の哲学」perennialism と比較する可能性も、アジア近代の精神史に残された課題だろう。

世界市民主義との関わり

AKC は第一次世界大戦におけるインドの英国への加担に真っ向から反対し、1917 年にはその結果として、北米への追放処分を喰らう。国際的無政府主義運動の研究者 Allan Antliff は『シヴァ神の踊り』に結実する論文群に、AKC とニューヨークの無政府主義運動との関わりを探る。これは筆者が得た感想だが、当時の社会運動は同時代の日本の大正文化と比較考量する価値がありそうだ。

AKC の唱えた「理想主義的個人主義」idealistic individualism は『白樺』の武者小路実篤、「脱工業化」post-industrial 産業社会論は柳宗悦の「民藝」、「世界市民的」ニーチェ解釈は登張竹風、生田長江や和辻哲郎らのニーチェ受容とも踵を接する。ウォル

ト・ホイットマンの流行も、有島武郎との同時代性を如実に感じさせる。ニヴェディタや AKC も親しんだ無政府主義者クロボトキンの著作『パンの掠奪』からの類推で誤解した日本の警察が、ギリシアの牧神にちなんだ北原白秋らの「パンの会」に集会条例違反容疑で踏み込んだ逸話は、会場で披露したら笑いが取れたが、大逆事件から関東大震災に至る同時代の左翼運動の官憲との「闘争」も、朝鮮の 3.1 事件、インドのアムリッツァー事件、中国の 5.4 運動などを関連させて捉える視点が必要だろう。Clive Bell や Roger Fry らによる Van Gogh の《種撒く人》解釈や、Paul Gauguin の南洋楽園への逃避願望を巡る解釈も、岩波書店創業など、同時代の社会情勢と無縁ではない。

AKC の 3 人目の妻となる Stella Bloch (1897-1999) ■06 については、カナダ・ヴィクトリアの Kim Crowell が報告した。Isadora Duncan の周辺から出発したステラは、1920 年に AKC と日本に旅行しているが、柳が AKC に会ったのもこの折りのこと。ジャワの舞踊に感化を得た彼女の軌跡は、AKC の東南アジア藝術への関心と平行す



■06 AKC と Stella Bloch 1920 年頃

るかたわら、同じジャワに着想を得た舞踏家だが、スパイとして処刑された Mata Hali (1876-1916) や「黒いヴィーナス」Josephine Baker (1906-1976)、さらには崔承喜 (1911-1969) らの事例との比較を促す。東洋の地位向上と女権拡張との関わりは、異国趣味を触媒とし、男性側伴走者の出自とも絡まる。アジア知識人男性と白人女性の関係は範例をなすが、発表者に何うと、AKC とステラとの膨大な往復書簡を通読して、女権論者としての自らの人生観も変貌した、とのこと。

デンマークのアールスで教鞭をとる Mark Sedgwick は、思想史家として AKC の哲学的側面に注目した。広い文脈では「永遠の哲学」philosophia perennis の系譜に自らを位置づける AKC は後年、René Guénon (1886-1951) にも接近し、『伝統研究』誌 *Études traditionnelles* にも寄稿する。晩年にはイスラームに入信しカイロでスーフィーとして過ごすゲノンは、欧州では神秘家として著名な反面、学術的には高い評価を得ていない。AKC はゲノンの説に学術的な厳格さを付与するかたわら、ゲノンらに対して、地中海古代の新プラトン主義やイスラームのスーフィーのほかに、ヒンドゥーのヴェダーンタに加えて仏教も「東洋」に淵源を発する「伝統主義」の源泉に含めるべきことを主張した。『ヴェーダ新研究』*New Approach to Veda* (1933) や『藝術における自然の変貌』*Transformation of Nature in Art* (1934) を受けた最晩年の『ヒンドゥー教と仏教』*Hinduism and Buddhism* (1943) にいたる道程である。その周辺には、ファシ

ズムとの関連で取り上げられることの多い Julius Evola (1898-1974) や、ゲノンとも近かった Milcea Eliade などとも浮かびあがる。

総じて、美術、舞踊、哲学(というより、AKC の用語ならば「形而上学」metaphysics)を横断しつつ、洋の東西を跨ぐ思索を展開する稀有な才能と時代性が縦横に照射された。

近代における文化遺産の破壊と再生

Samit Das はシャンティニケタンにタゴールが創設した大学の出身者。AKC の著作の題名を入れ替えて「自然のなかでの藝術の変貌」を掲げ、インド独立に先立つ時期のタゴール ■ 07 との交渉のなかで AKC を捉え直す。コルカタ近郊の森のなかにひろがるビッシュ・バーラーティ大学のさまざまな建築と周囲の自然の意匠との融合を、巧みな造形感覚で写真に収めた仕事で知られるダスは、AKC が美術と宗教との融合に東西対話の可能性を見出したことと、タゴールが自らの精神を物質と一体のものと捉えたこととに平行を見出す。かれらにとって藝術とは、美術館に幽閉されるべきものではなく、日常生活と一体に自



■ 07 AKC とロビンドロナド・タゴール 1930 年頃

然と統合されて顕現するものだった。我が身は土くれでもあれ、流れる水でもあれ、樹木の小枝、果実あるいは咲き誇る花でもあれ、そのひとつの生命とともに世界を彷徨する我は、何も思い悩むこともなく、どこへ赴こうとも無限なるものに抱かれ、無際限な自己を見出すだろう。詩人はそう謳う。ダスはそこに、タゴールとヴィヴェカーナンドとの共鳴を捉え、若き AKC の精神的支えともなった、シスター・ニヴェディタが藝術に抱いた理想をも透視する。

マレーシア大学の Simon Soon は、晩年の AKC と文通を交わし、この「聖人学究」の没後スリランカに AKC の記念文書館を設立したマレー系セイロン人、Durai Raji Singam を取りあげた。1946 年 5 月の書簡で、AKC は自分の伝記などにはまったく関心がない、と述べており、その知的遺産を収める記憶収蔵庫は、ヴァルター・ベンヤミンの言う意味での寓意 Allegorie をなした、とスーンは見る。タミル系とシンハリ系との民族対立が激化するなかで、シンガムの試みは、離散状況の憂き目を見たタミル側の道徳的抵抗とも価値づけされる。だが、かれが生涯を捧げたこの仕事は、結局、開館してほどなく、図書館への放火の巻き添えを食い、灰燼に帰す。この炎の試練が何を意味したかは、後に考察する。

カースト制度と近代的技術専門学校と
シンガポール国立大学の Priya Maholay Jaradi は、Sayajirao Gaekwad III (1863-1939) がマハラジャとして君臨

し美術教育や産業育成にも尽力したグジャラートのバローダ藩王国の事例を、豊富な一次資料をもとに報告した。その近著 *Fashioning a National Art* (2016) や *Baroda: A Cosmopolitan Provenance in Transition* (2015) などに拠れば、欧米でも知られた Raja Ravi Varma の油彩画のほか、Sankheda の漆器、Patan Patola の織物など地域の名産が外国向けにも展示販売されるようになる。国産品市場が欧米との交渉のなかで形成され、そのかたわらで宮殿には海外の美術品が収集された。Augusto Felici や Derwent Wood といった藝術家が招かれる一方で、地域出身者には象牙職人の Neelakandan Asari、木工職人の Keshav Mistry らの名が知られる。この発表は、AKC がボストンに拠点を据えて活動していた同時代のインド亜大陸の美術産業の動向を具体的に示している。

マホリー・ジャラディーは、こう総括する。1890 年、欧州に模範を取るような技術専門学校 Kalabhavan Polytechnic をバローダに創設したサヤジラオ 3 世の開明主義的な産業育成策は、「ボストンの巨人」が初期の『インドの職人』(1909) で描いたような、カースト制に立脚した思弁的中世主義の理想とは対極をなす。しかしながらこれらは、双方とも、欧米側の無知や偏見に対抗する工藝やデザインを志向する近代性の証だったのだ、と。私見を挟むなら、インド植民地博覧会開催に先立つ 1870 年代中頃から、欧米における東洋陶磁器に対する趣味はおおきな変化を関する。日本を例にとれば、見事な形態に自然主義な

いし幾何学模様の繊細な極彩色や金彩の絵付けを施し、すべすべの釉薬で覆った、それまでの輸出用磁器に代わって、茶の湯で使われる時代物の、歪な形態に地味な胎土、自然に流れ落ちたかのような釉薬が偶然任せの不規則な景色をつくる茶陶や炝器へと、欧米好事家の関心は急速に変わってゆく。同様の趣味の変化が南インドでも観察されたのか。それへの現地側の対応はどうだったのか。それを探ることが、1918 年若きグルチャラン・シンが日本を留学先に選んだ理由の解明に繋がるだろう。かれの「民藝」発見や李朝白磁の「蓮華紋」への開眼は、大英帝国植民地の輸出工藝からの意図的離反だったのか。それとも植民地状況下でのインド亜大陸と朝鮮半島で発生した、平行現象としての伝統工藝再発見だったのか。

炎による消滅と再生

続いてシンガポールの藝術家・デザイナーとして高名な Simryn Gill も交えて、総括の討論となる。当方は昨日の討論で司会を命じられ、それなりに良い論点を導きだしたと誉められもしたのだが、自分で記録を取る余裕はなく、すでに内容は忘却。この日も請われるままにいくつか発言したが、記憶にとどまる論点を一点摘要するに留める。

シムリンの作品にもみられたように、近代が崩壊した現在、近代の遺産の廃墟をいかに再活用するか、が問われている。AKC はボストン美術館の収集において、ガンダーラの仏教彫刻を含む遺物を購入した。ここには所

謂トルソー、手足や首の欠けた裸体像がある。先行する岡倉も中国で発見した石像の残骸をボストンに送っている。それはギリシア・ローマの torso が西欧の美術館では珍重されるという事実を知ったうえでの選択だろう。それはまた、形あるものは崩壊するという宿命の寓意ともなる。後世に残し得たものは、喪失の痕跡を宿している。デュライ・ラージ・シンガムが心血を注いだ AKC の記録収蔵庫は火災により灰燼に帰した。だがそれは、『シヴァ神の踊り』の著者にとってみれば、当然の運命ではなかったか。滅びを約束する焔からこそ、初めて再生の契機が生まれる。AKC の遺産を現時点で問い直す今回の試みは、破壊と創造の弁証法を仏教とヒンドゥーの教えの裡に確認する営みだったはずだ。

午後にはシンガポールの現代美術研究に関する最長老である T. K. Sabapathy に Shabir Hussain Mustafa が面談した記録ビデオ、Charles Lim 撮影の作品が上映された。サバパティ教授は南インドと東南アジアの美術史に架橋を試みた AKC の先駆的な業績に対して、両地域の交差点に位置するシンガポール在住の研究者として、慎重に言葉を選びつつ、その功績を評定した。さらに夕刻からは、南アジアで開催された大規模な現代美術展を回顧するパネルが開かれた。Asian Art Archive の John Train 司会のもと、Jyoti Dhar がスリランカの「白地図の海」unmappable sea、Kurchi Dasgupta がネパールはカトマンズのトリエンナーレ、Rattanamol Singh Johas がインドのコーチン・ビエンナー

レ、Musatafa Zaman がバングラデシュ・ビエンナーレの歴史をそれぞれ手短に報告した。

ふたつの注記に留める。まず、いささか驚くべきことだが、バングラデシュの現地側には、日本の国際交流基金の肝いりで 1981 年に始まった Asian Art Biennale が英連邦の文化的植民地状況からの訣別の契機となったとの鮮烈な認識がある。油彩画や彫刻を中心とする美術アカデミーの価値観が崩れ installation が隆盛を極めたのは、日本からの影響だ。そしてそれが「近代」から「現代」への分水嶺だったのだ、という。思えば当時、バングラデシュからは少なからぬ美術留学生在が日本に到来していた。なかには将来を嘱望されながら不応で鬱病を病み自殺し、日本官僚側が理不尽な対応を露呈した不幸な事例も知られる。

「食べられる曼荼羅」騒動

いまひとつは、クルチ・ダスグプタが報告したカトマンズでの出来事。2017 年の展示には、中国の Song Dong が《Mandala City for Eating》■ 09 を出品した。砂曼荼羅を模して、高級ビスケットを組み合わせ、直径



■ 09 Song Dong 《Mandala City for Eating》2017
(観衆に「食い荒らされた」状態／撮影：稲賀繁美)

10m を超す曼荼羅がつくられた。聴衆には、これを摘まんで食べることが期待され、会期終了までには作品は崩壊を遂げていた。だがインド出身のキュレーターには、これは神聖冒瀆にして、道徳的にも不埒な増長と映った。当時、現地は大地震からの復旧途上にあった。話してみると、どうやら中国側の価値観とインド側のそれとが、食い違っている。中国側は被災への精神的支援の表現としてビスケットを用意した。公式行事でしばしば開かれる中国型来賓歓待の宴席がモデルだろう。ところが振る舞われた菓子は、不釣り合いに高価な舶来品で、開催資金の大半がそれに浪費され、これがインド側に憤懣を招いたらしい。断食を含む精神修養を実践し、禁欲を旨とする社会の出身者からみると、資金力にモノを言わせて恩恵を押しつける売名行為の美術版、との悪印象を禁じえなかった、というのだ。

ここには宗教的儀礼の世俗化が、宗教的背景の違いから、思わぬ誤解を惹起せしめた例がみられる。だがさらにここには、西欧起源の制度としての美術や展覧会という枠組みが孕む、異文化の相互誤解も重なっている。例えば30年前にパリのポンピドー・センターで『大地の魔術師』展が開催された折り、チベットの砂曼荼羅を開催後に保存するか破壊するかで、論争が発生した。チベットの僧侶たちは、煩惱を断つためには、儀礼が終わったところで砂曼荼羅は崩して自然に戻さねばならない、と主張する。だが、作品は保存されるべきものとするフランス側は、作品消滅などとてもない

と抗弁する。この基本的対立に、今回は摂食か絶食かという倫理観の対立が複合した。食用可能な美術作品という着想は、中華料理のお国柄を見事に反映している。対するに、ヒンドゥーの牛や、イスラームの豚など、宗教上、食品の摂取に纏わる禁忌が複雑に入り組むのが、多民族・多宗教の南アジア世界だった。

会場瞥見：おわりにかえて

もはや、横浜トリエンナーレに匹敵する規模を誇る展覧会の様子を仔細に述べる紙面はない。わずか2週間の会期で10数万単位の膨大な観客動員数を記録するのはなぜか。その疑問にだけ答えておこう。来場者は日本のように現代美術に関心を寄せる少数の若者や専門家には限られない。中産階級を含む多くの市民が、とりわけ女性たちは見事に着飾って、来場する。目当ては作品を前に、あるいは子供連れの家族で、あるいはカップルで写真を撮ることにあるようだ。どうやら庶民の生活水準とは無縁の資産価値をもつらしい作品群をまえに、記念写真を撮ることが、来場者たちの社交をなしている。展示の側でも、そうした来場者の希望に沿うべく、集合写真を撮るのに適した店構えや、顔出しパネル式の細工を施したとみられる作品が少なくない。■10

そして会場の屋外では、大音響の演奏会のかたわら、屋台の飲食店が軒を連ね、テントの下では、膨大な数にのぼる来訪者たちが、終日おしゃべりに余念なく、余暇を満喫している。熱気に包まれて雑踏する会場内外を

■ 10 「DAS 2018」会場の情景 (家族写真撮影を見越した展示／撮影：稲賀繁美)



経巡りつつ、不思議な感動が湧いてきた。そう、一言で美術を鑑賞するといっても、そこには社会慣習の違いが如実に現れるのだ。

蛇足ながら、帰国途上にシンガポールの空港売店で Pankaji Mishra の *From The Ruins of Empire* (Penguin, 2012) を見つけ、機内で貪り読んだ。日露戦争から筆を起こし、アル・アフガーニーに梁啓超、タゴールを軸に、アジアの近代の蹉跌を見事な絵巻に収めて間然としない。帰国して確かめると、2014年に『アジア再興：帝国主義に挑んだ志士たち』として園部哲の名訳で白水社から邦訳が刊行されていた。数年前に筆者が『東方意識：夢想と現実のあいだ』（ミネルヴァ書房、

2012）を編んだ時には、まだ刊行以前で言及できなかった問題作である。

西欧主導の近代とは何だったのか。たった3日のダッカ体験だったが、それを通じて、帝国日本の過去を問い直し、アジアの現在そして将来を広く省察する必要を痛感した。内向きの日本列島に閉塞していたのでは、これはおよそ見えてもこない世界である。

* 会合にお招き頂いただけでなく、帰路立ち寄ったシンガポール国立画廊で展覧企画を案内してくださった Shabbir Husain Mustafa、シンガポール植物園ほど近くにある広大な自宅にお招きくださった映画監督の Charles Lim のお二人に、この場を借りて謝意を述べたい。

2018年3月8日記